

石岡市立ふるさと歴史館第三十九回企画展 いまゆくすゑも定めなき 土器にて

土器は
完成してから、
どんな環境で
どんな使われ方を
したのだろうか。
そんな「定めなき」
土器の
「ゆくすゑ」に
迫る展示
を開催します。

期間
令和七年
一月八日（水）
～四月六日（火）
時間
午前10時
～午後4時30分
月曜休館
入場無料

石岡市立ふるさと歴史館
石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内
電話 0299-23-2398

※この「ゆくすゑ」はありませんが、
片断は展示されています。
※「定めなき」ポスターを掲載しました

いまゆくすゑも定めなき土器にて

◆目次

はじめに	1
ゆくすゑ①：土器片錘	2
ゆくすゑ②：土製円盤	8
ゆくすゑ③：有孔円盤	13
ゆくすゑ④：齧痕？	14
ゆくすゑ⑤：土器の壊れ方	16
おわりに	17

◆例言

本冊子は、令和7（2025）年1月8日～4月6日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第39回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（金子悠人）が行いました。

◆謝辞

展示にあたり、以下の方にご協力いただきました。御礼を申し上げます。

畑山智史

はじめに

今回の展示は「いまゆくすゑも定めなき土器にて」と題しています。

縄紋土器は①粘土を調達する、②粘土をこねて成形する、③文様などを付ける、④しばらく乾燥させる、⑤野焼きをする、という工程を経て完成したとされます。完成した後は、皆さん想像の通り、煮炊きの道具として使用されたと考えられています。

いくつもの工程を経て完成する土器ですが、何回も使用しているうちに破損してしまいます。もしくは縄紋人が意図的に割っているかもしれません。また、野焼きのタイミングで破裂して完成にまで至らない土器も存在します。粘土・土器の「ゆくすゑ」はいつも「定めなき」ものなのです。

今回の展示では、そんな「ゆくすゑ」から、当時の生活に迫ろうと思います。

ゆくすゑ①：土器片錘

ここからは、様々な土器の「ゆくすゑ」をみていこうと思います。まずは、土器片錘です。石岡市で発掘作業をしていると、霞ヶ浦沿岸やその周辺を中心として、土器片錘と呼ばれる遺物に遭遇します。

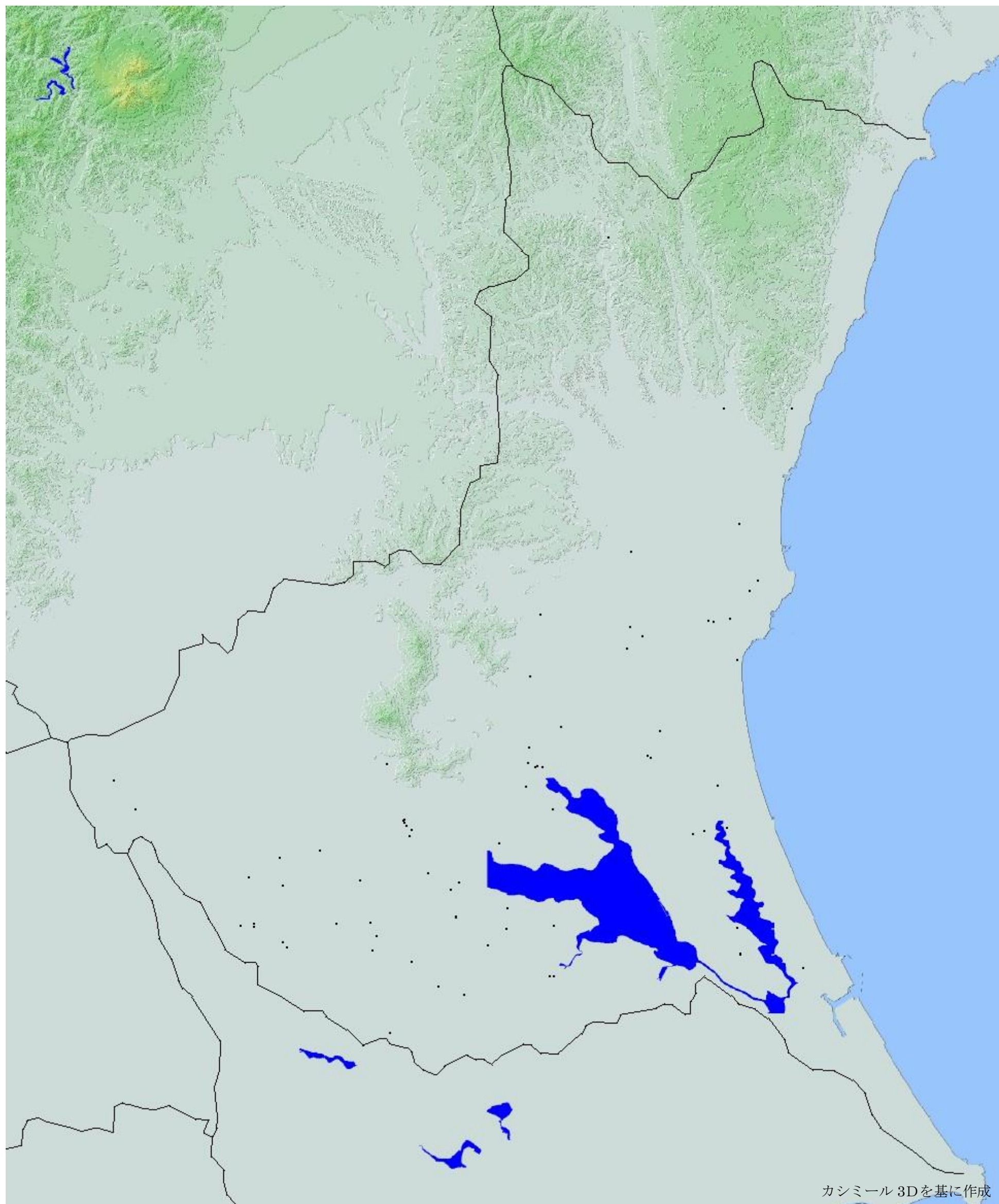
土器片錘は、土器の破片を打ち欠いたり、抉ったりすることによって切れ目を入れた遺物です。土器の文様が残されていたり、底部や口縁部などの特徴が判別できたりするものがあるため、土器をリサイクルしたとも考えられます。

土器片錘は多くの研究者の中でおもりとして考えられてきました。また、織物の際に用いるおもりなどの説もあるものの、漁網などにくくりつける錘としての用途が支持されています。

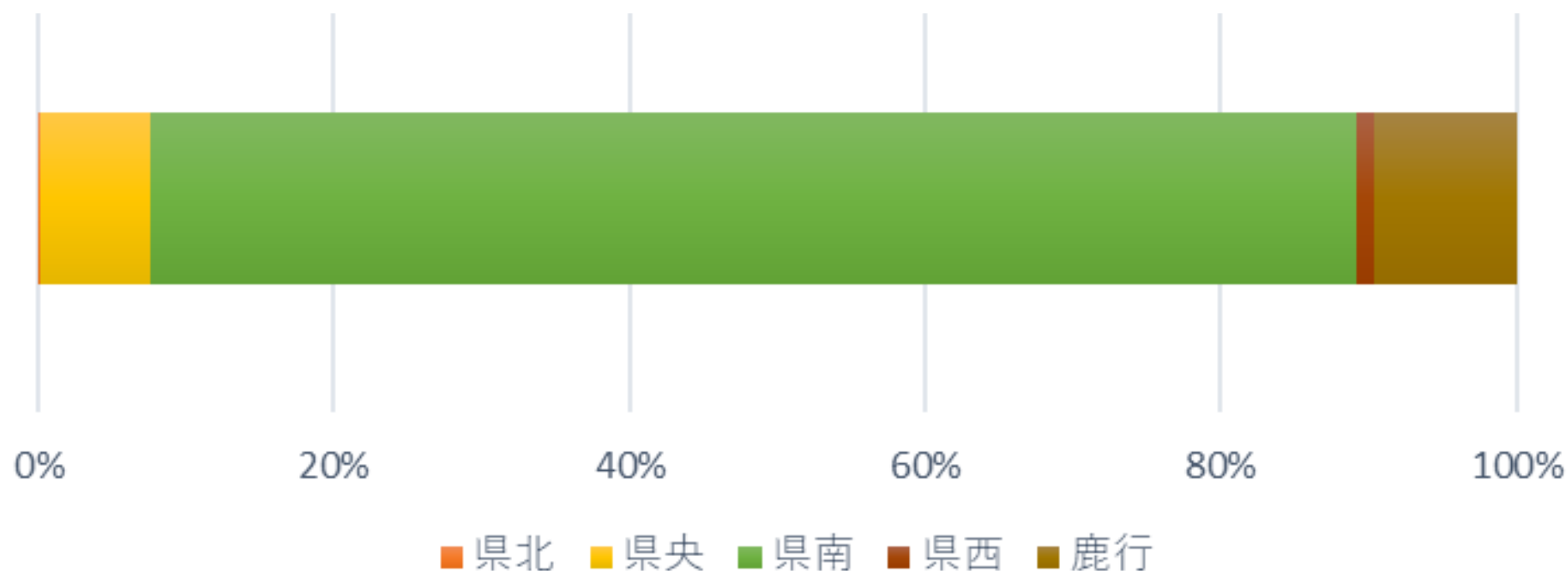
展示室中央に所狭しと並べられているのが、土器片錘です。ほかに、溝を掘ったりするものも一部散見されます。実際にじっくりと観察してみてください。

パネルでは石岡市でも多く出土する土器片錘を、茨城県の状況も踏まえながら、より詳しくみていくことにしましょう。

土器片錘は、茨城県全体でも多く出土しています。以下が茨城県の遺跡報告書を中心に調べた土器片錘の出土した遺跡を示したものです(黒点部分)。

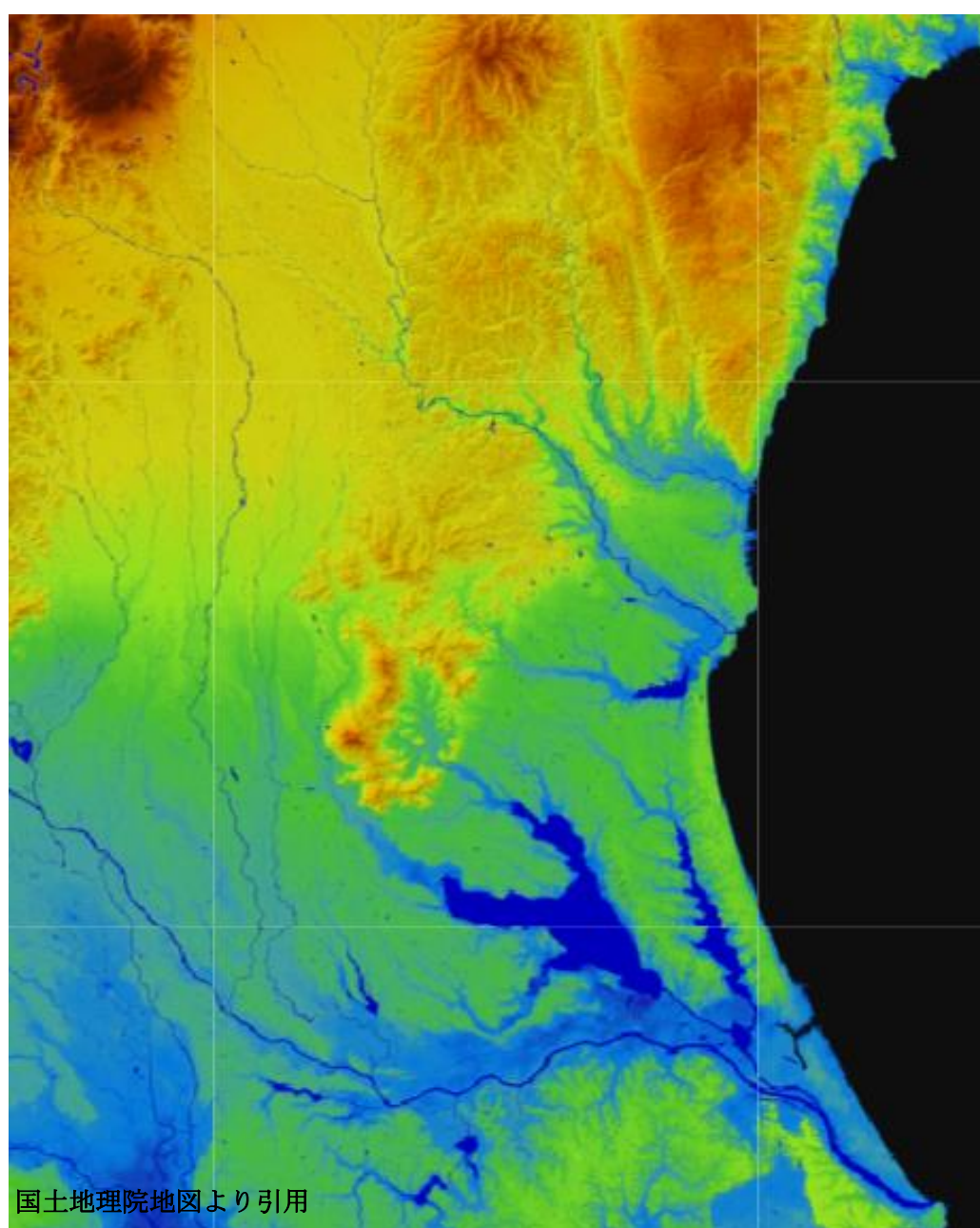


その分布は、霞ヶ浦沿岸や利根川流域を中心に涸沼周辺、太平洋沿岸など幅広い地域にみることができます。



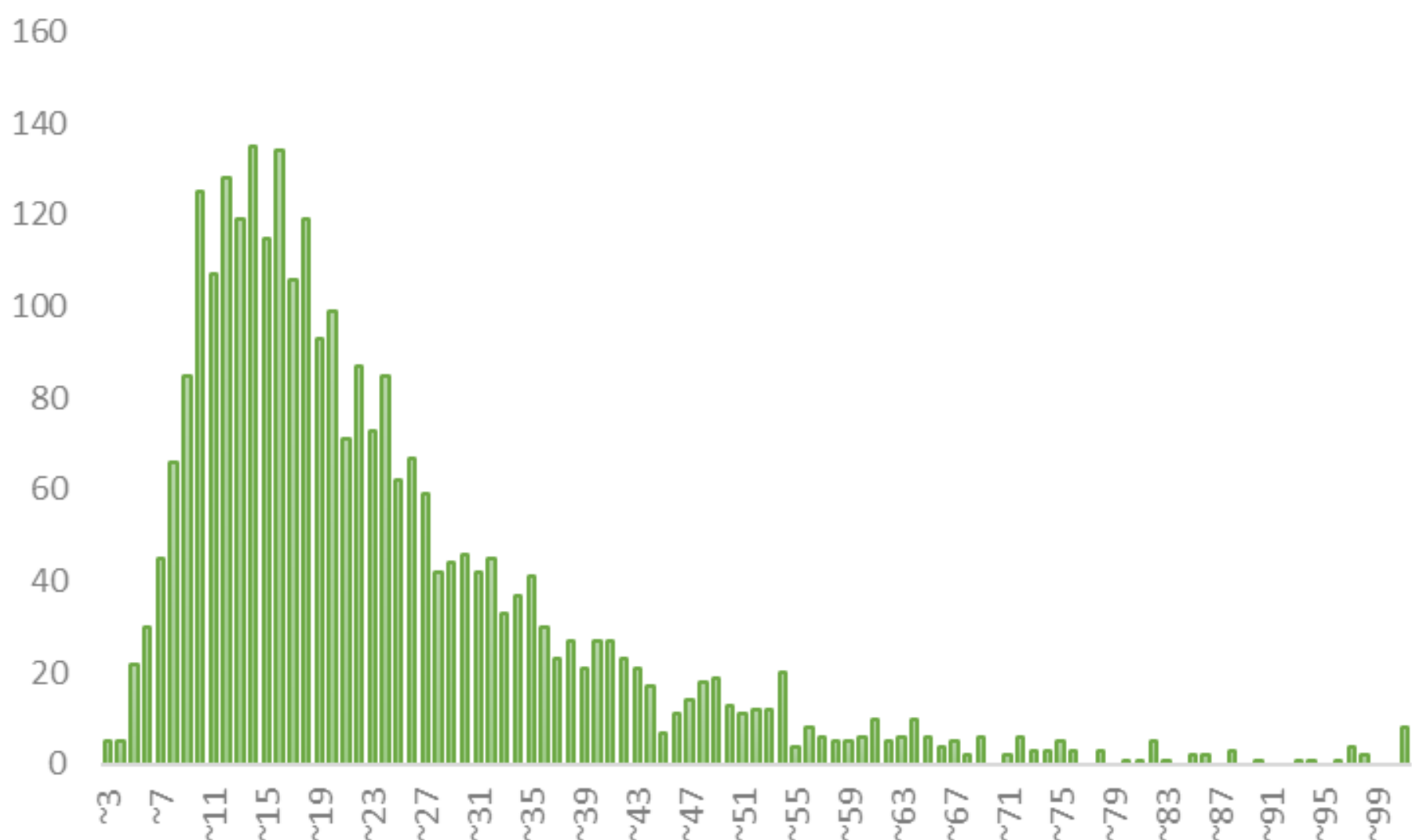
現在の行政区分で当時の生活を示すのはナンセンスかもしれませんが、土器片錘の報告数と地域との関係を見てみると石岡市を含めた県南地域が圧倒的に多くなっています。

これは、現在よりも海面が高い当時、右の水色の部分まで水が入り込んでいたと考えられており、漁労のおもりとして利用されてきた土器片錘もその水辺に沿うように多数確認されたものと思われます。



国土地理院地図より引用

次に、土器片錘の重量をみてみましょう。大きさと重量が比例することは多くの研究により、実証されています。そこで、今回は報告された土器片錘の重量を調べてみました。

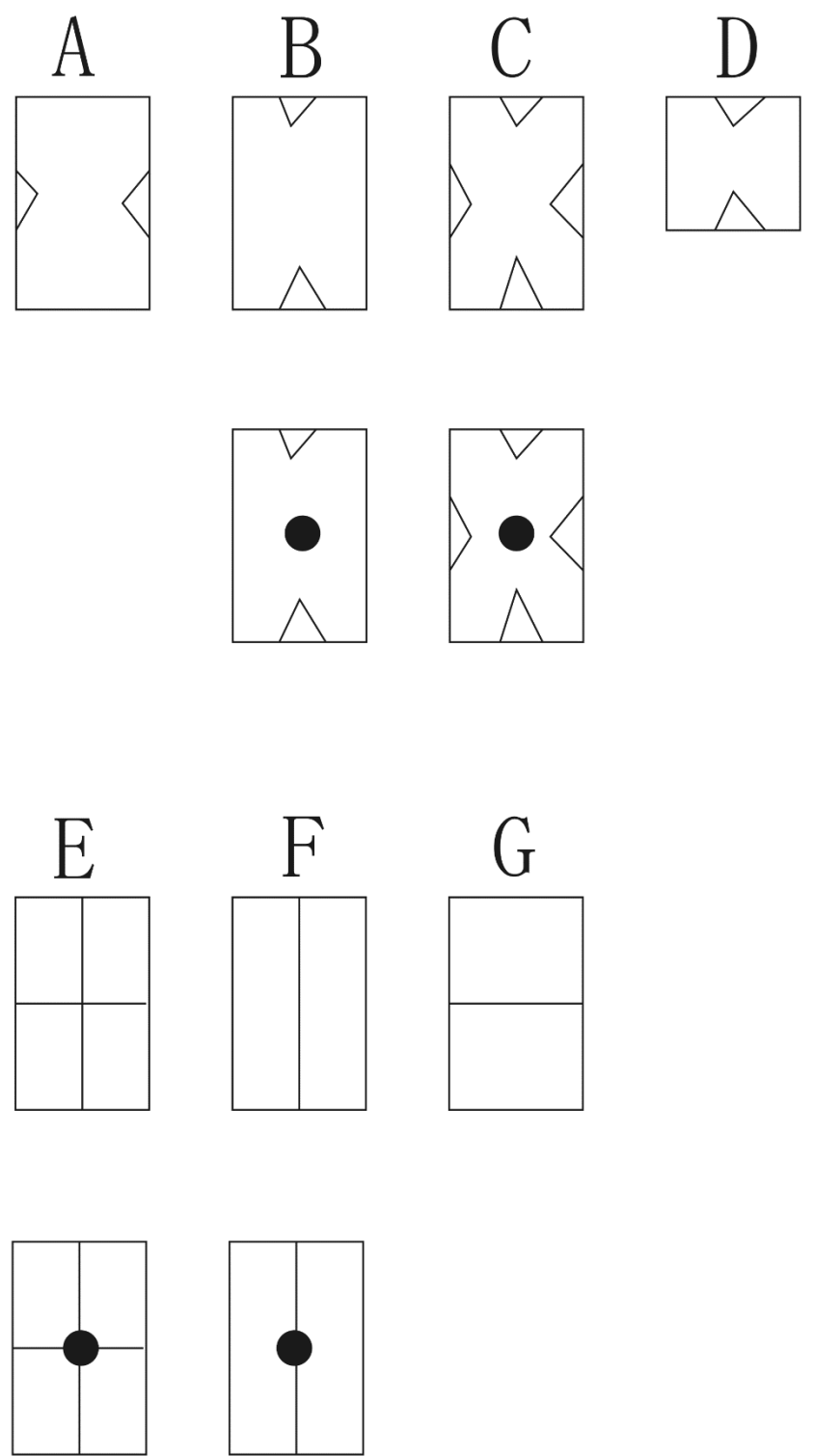


10～18g をピークとして基本的には一峰性のグラフとなりました。平均は $23.6(\pm 15.9)$ g でした。武蔵野・多摩・地域を対象とした研究でも 10～20g にピークが存在するため、地域的に大きな差異は確認できませんでした。

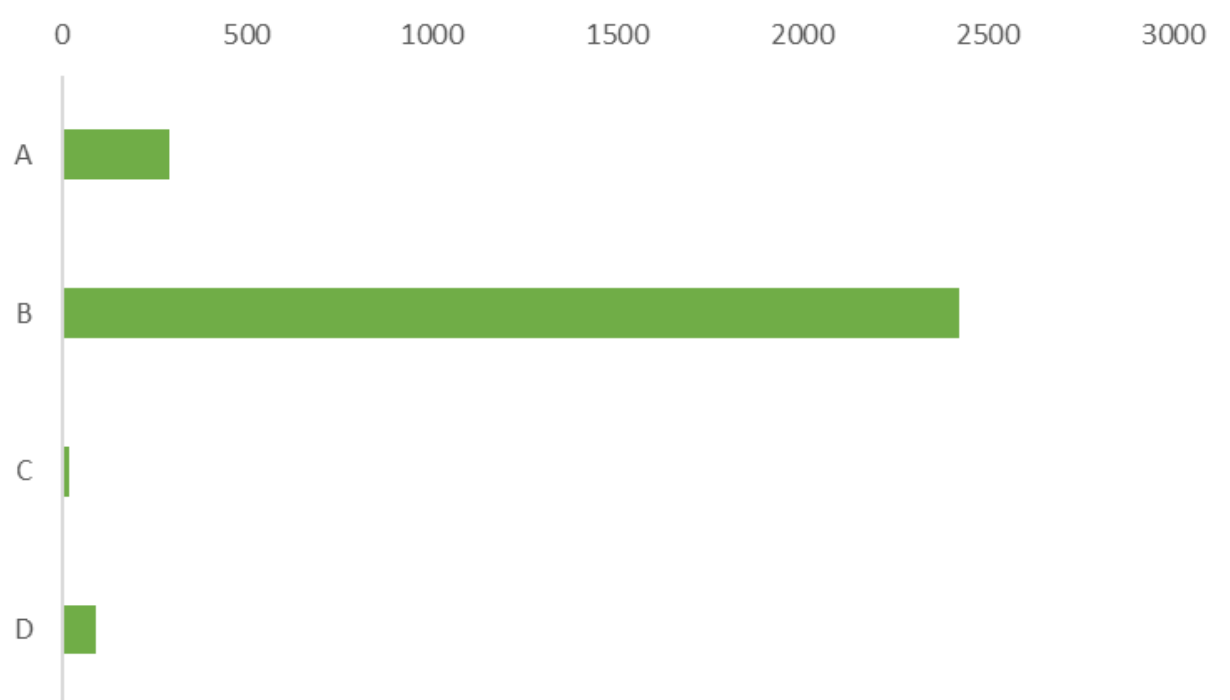
ちなみに、石岡市のみの土器片錘で調べてみると、 $16.45(\pm 11.68)$ g でやや平均値は下がるものの、県と同様に 10g 程度をピークとする結果が確認できました。

ここからは、土器片錘の形態をみていきましょう。

形態は、過去の研究も参考にしながら、長軸が打ち欠いているもの(A)、短軸が打ち欠いてあるもの(B)、長軸も短軸も打ち欠いてあるもの(C)、長短軸が同じで、どちらかが打ち欠いてあるもの(D)、また後晩期にやや多くみられるようになる有溝土錘と呼ばれる、溝のある土錘も念のため分類分けをしました(E~G)。



茨城県域の様子を確認すると、圧倒的にBの個体が多くなっています(右下)。石岡市でも、その状況と同じようにBの個体が多数を占めていました。何らかの意図を感じます。ぜひ本物を確認してみてください。



次に、形態ごとの長軸と短軸の差を確認してみました。
A の個体は、長軸-短軸の差の平均が 0.39、B の個体は 1.04、
C の個体は 1.49 となっていました。

A の個体は B・C よりも差の平均が小さくなっていました。
つまり、A は破片の時点から、B・C とは異なる製作方法
がとられていたのかもしれませんが。

B・C を目指して土器片錘を製作する場合は、土器片を長
方形・長楕円形に近く、一方 A や D を目指して製作する場
合は、正方形・正円に近く土器片錘を製作していたのかも
しれません。

もしかしたら、土器片錘も何種類か異なるバリエーショ
ンが作られていたのかもしれませんが。

弥生時代以降、土器片錘は管状土錘(細長い筒のような
形をした錘、展示物をご覧ください)の台頭により、減少し
ていきますが、石岡市を主体とした県南域を中心にみられ、
漁労として使用されたと考えられること、短軸を打ち欠く
ものが多いがバリエーションのある可能性があることな
どが確認できました。

ゆくすゑ②：土製円盤

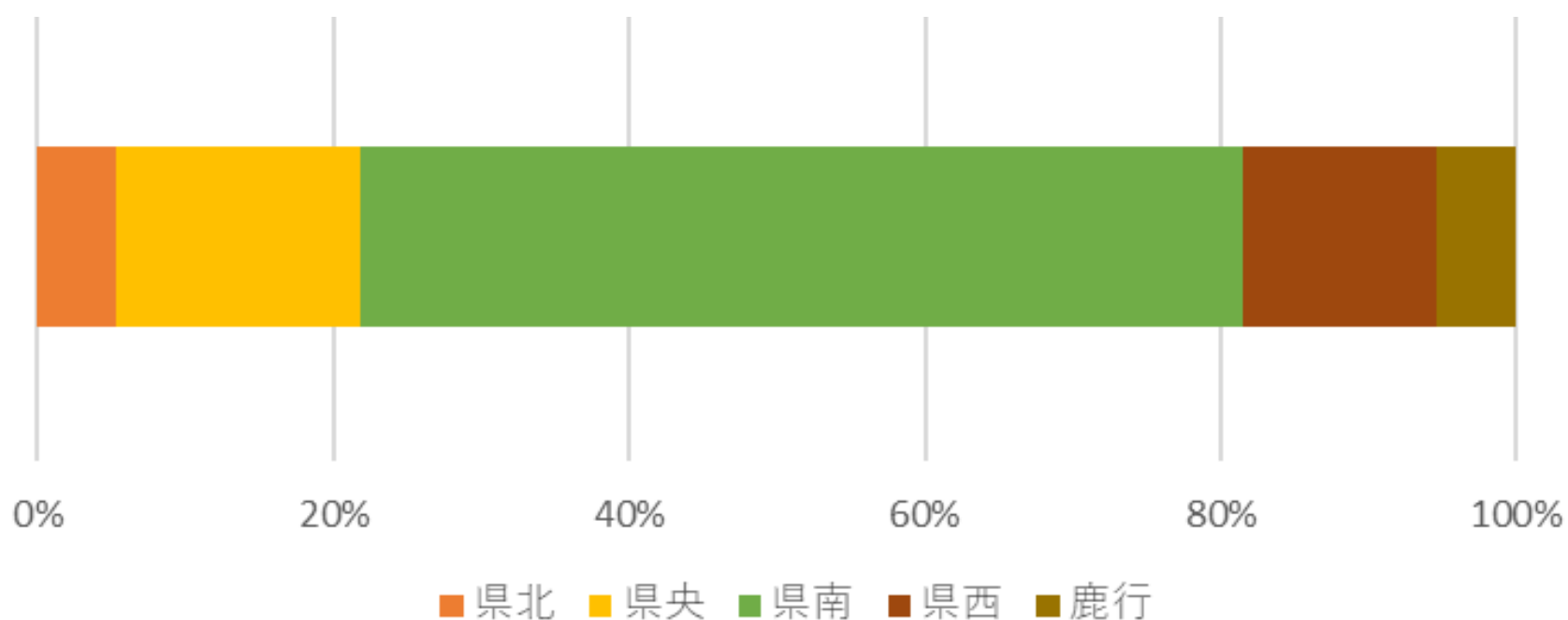
土器片錘となった土器の「ゆくすゑ」をこれまでみてきました。ここからは、それに形状がよく似た土製円版についてみていきましょう。

土製円盤は、土製円盤(板)、円盤状土製品、再利用土器片、土器片円盤、二次利用土器片 B など多くの呼称で呼ばれてきており、土器の破片を研磨・剥離などして円形などに仕上げたものです。ここでは仮に土製円盤として紹介します。土器片錘のように決ったりしていません。

そのため、古くから発掘調査などで出土し、認識はされてきたものの、いまだにその用途は謎に包まれています。これまで、マダケの直径と類似することから竹筒の蓋とする説、木器や石器、土器や骨角器など様々な研削具とする説、祭祀用具や計算用具、トイレットペーパーとする説まで多くの用途が取り上げられてきました。

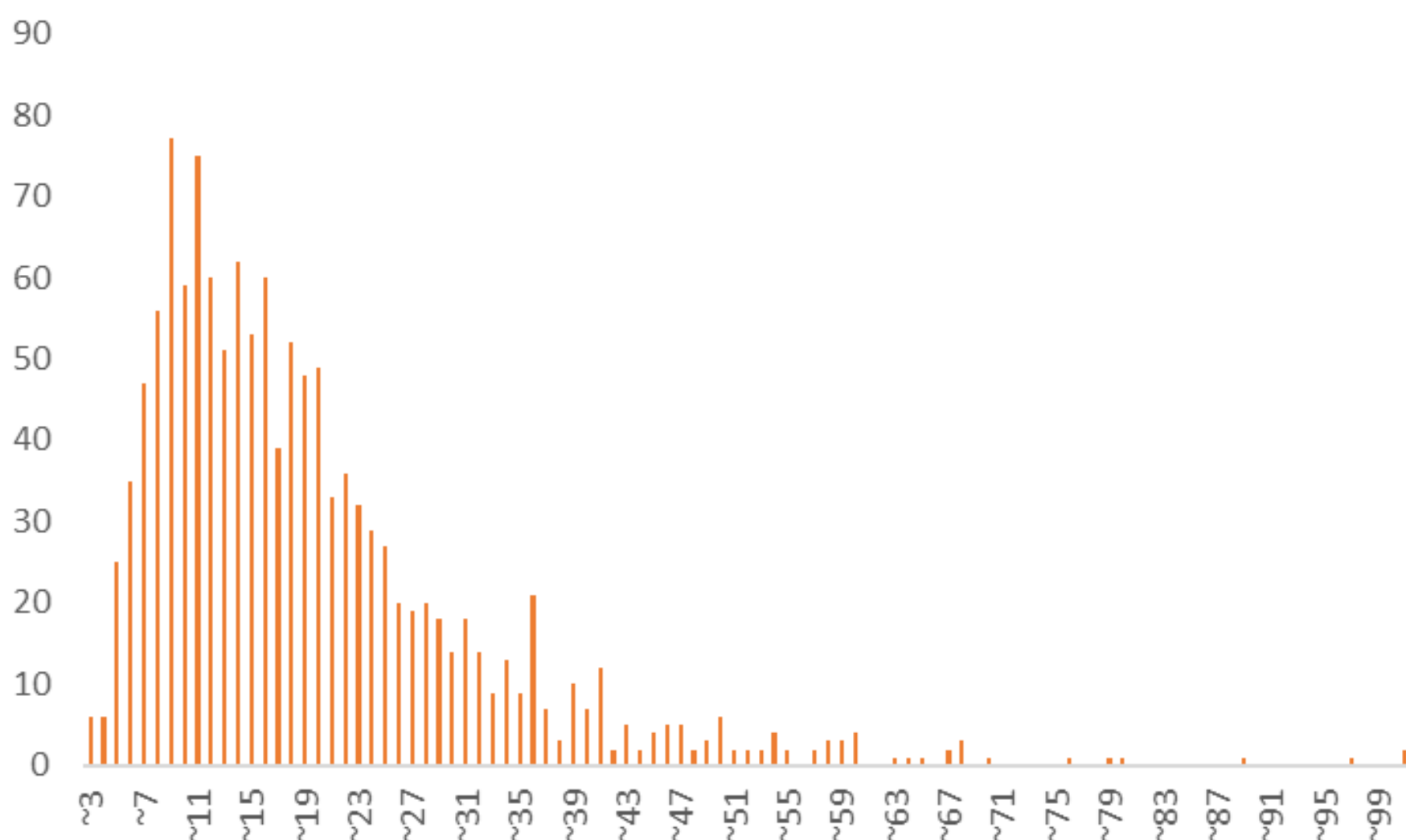
そんな、土製円盤ですが、石岡市でも出土していますので、その様子を茨城県域と対比しながらみていくことにしましょう。

土製円盤は、茨城県域でも、数多く出土しています。



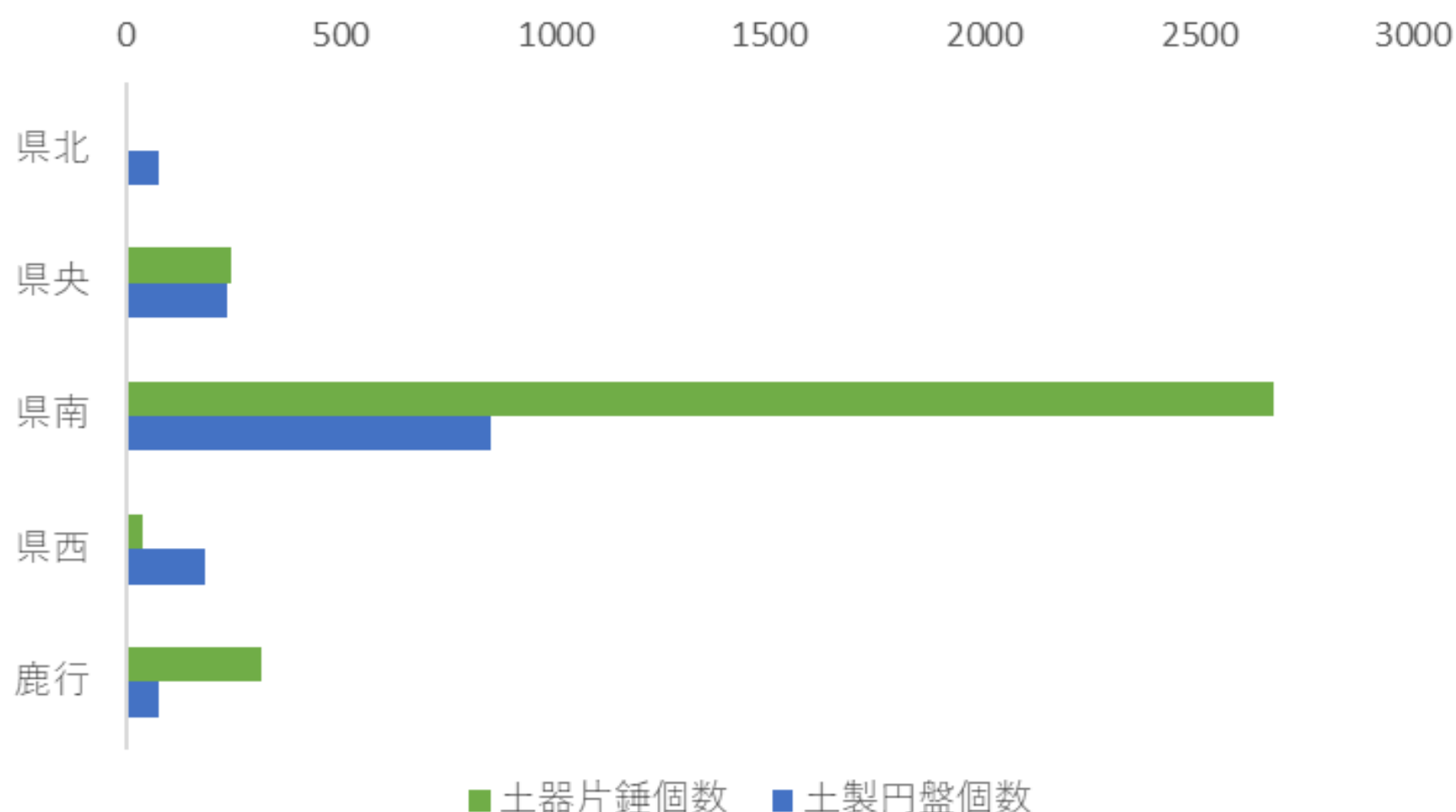
ここでも、土器片錘ほどではありませんが、石岡市域を含めた県南地域が圧倒的な出土量を示しています。

次に、その重量を確認しましょう。



重量は、平均 $19.15 (\pm 13.67) \text{ g}$ と、土器片錘と比較して4g ほど小さくなっていましたが、グラフは土器片錘と同じような一峰性のグラフとなっていました。

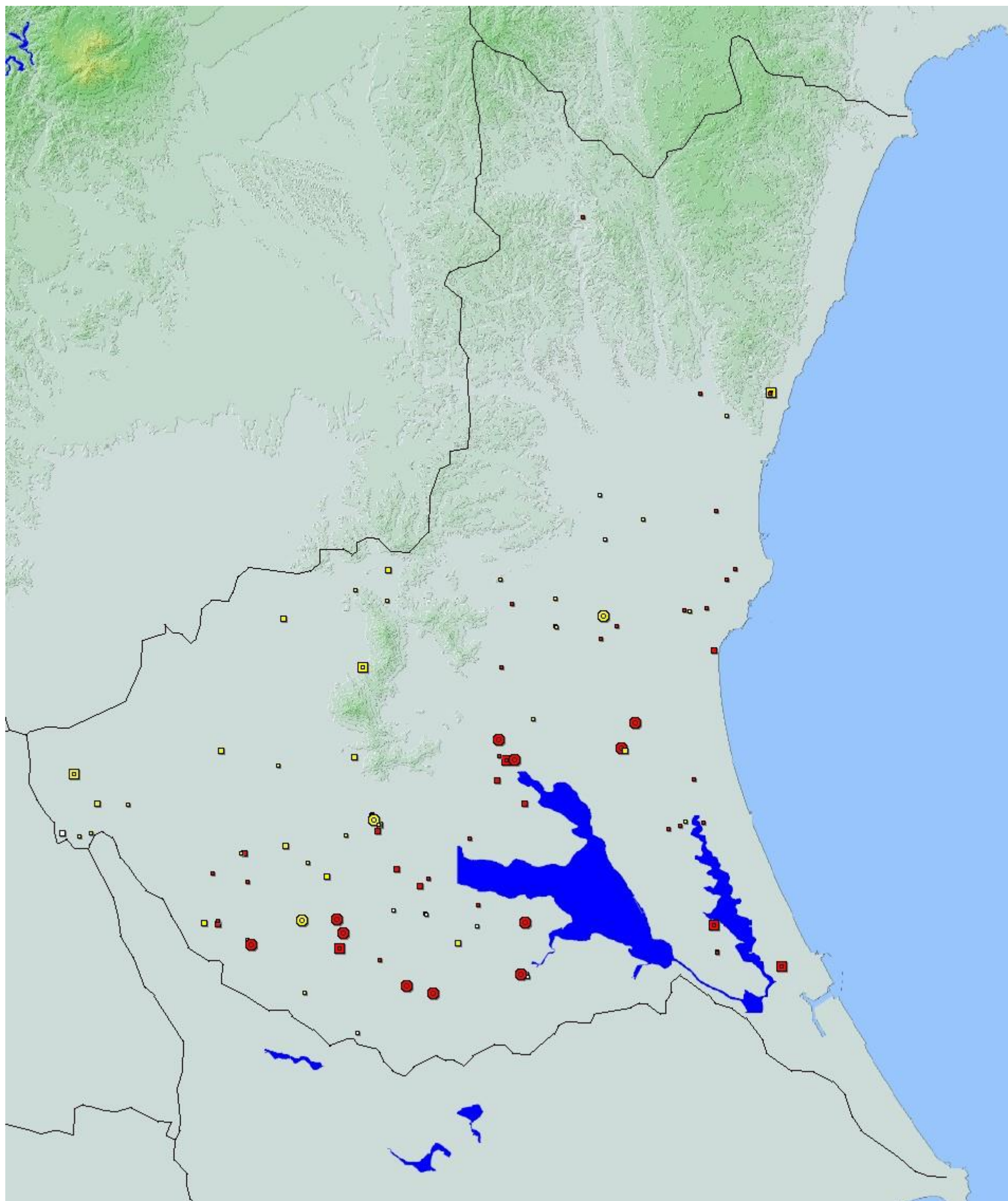
ここまで、やや小さいことを除けば、土器片錘と類似しているため、土器片錘との関係を調べてみることにしました。



県南地域がいずれも圧倒的な数量なのはこれまでも述べてきましたが、地域ごとに確認していくと、鹿行地域はより土器片錘が多く、県央は同数程度の出土量、県西は数量こそ少ないものの土製円盤の量が多いことが分かりました。

そこで、県内の遺跡ごとに土器片錘と土製円盤の報告数の割合を比較してプロットして見ることにしました。**赤**が**土器片錘**の割合が多い遺跡、**黄色**が**土製円盤**の割合が多い遺跡です。点の◎→□(大～小)となるにつれ、報告数も少

なくなります。また、一部確認できなかった遺跡や同率の遺跡(白)も存在します。



カシミール 3Dを基に作成

大まかではありますが、涸沼・涸沼川以南および筑波山
以東を中心とした霞ヶ浦周辺域とそれ以外で土器片錘と
土製円盤の割合が逆転していることが確認できます。涸沼
周辺や県北地域の海岸線など、漁労がおおよそ盛んである
地域でも、その割合の変化は顕著です。

このことから、霞ヶ浦周辺とそのほかの地域では、茨城
県内でも異なる文化的な要素を持つ可能性が考えられま
す。石岡市は、そんな霞ヶ浦周辺域の北西にあり、それ以
外の地域との交流も盛んだったかもしれません。そんな想
像が膨らみますが、皆さんはどう思いますか。

と、ここからは土器片錘と土製円盤についてもう少し考
えてみましょう。土器片錘は霞ヶ浦周辺に多いです。同時
に数量だけでみれば土製円盤も多いです。一方、他の地域、
特に漁労が発達したと思われる涸沼・海岸エリアでは片錘
の割合は顕著でなく、他の錘を探さねばいけません。土製
円盤もその錘の仲間ではなかったのでしょうか。川・入江・
海、それぞれの場所に適した道具もあるはずです。もちろ
ん研削具にも使用していた可能性もありますが、その具体
的な「ゆくすゑ」を知りたいものです。

ゆくすゑ③：有孔円盤

土器片錘・土製円盤となった土器たちの「ゆくすゑ」をみてきました。ここからは有孔円盤についてみてみましょう。

有孔円盤は、土製円盤の中央に穴があげられたもので、土器片を加工して穴をあけたもの、粘土の状態でそれを目指して製作されたものの2種があります。土器片を加工したものの中には、展示した宮平遺跡例のように、中途半端に土器に穴をあけようとした？かもしれない未成品も確認できます。未成品は、土製円盤もしくは有孔円盤未成品として呼称も明確ではありません。

これらは、土器片錘や土製円盤などと比較すると、数量的にもとても少なく、用途についても土製円盤の時と同様に研削具とするものや紡錘車とするものまで決まっています。

皆さんはどう考えますか。紡錘車も展示しましたので合わせてご覧ください。

ゆくすゑ④：齧痕？

これまでは、縄紋人の土器の再利用について、土器片錘・土製円盤・有孔円盤をみてきました。ここからは、そんな磨かれた土器片たちに別れを告げて、土器の置かれた環境の一端が分かる資料をみていきましょう。

展示されている白久台遺跡の縄紋中期の土器の内面をご覧ください。矢印で示した部分は、平行した2本の直線がまとまって確認できます。これらは、ネズミ類やリス類に代表されるげっ歯類の齧痕と考えられます。

げっ歯類は、切歯(前歯)が常に伸びる動物であるため、その伸びすぎを調整する為に固いものを齧り、調整しているとされています。今回認められた痕跡は、切歯を前後に2本動かすことによってつけられたものであると考えられます。

こうしたげっ歯類による土器の齧痕は、ひたちなか市の岡田遺跡や、千葉県の遺跡でも確認されています。

注意してみると、今後の発見例が増加するかもしれません。

この齧痕はいつ付けられたのでしょうか？

土器による調理が済んだ後、においにつられて中に入り込んだネズミが外に出られなくなり、中で歯を削り始めたのでしょうか。それとも、すでに割れて不必要になり横倒しに捨てられていた土器が、思わぬメンテナンス道具となったのでしょうか。もしくは、縄紋時代よりずっと後、埋まっていた土器が何百・何千年の時を超えて再利用されたのかもしれません。

弥生時代になると、農耕・稲作が展開されるのに合わせて、ハツカネズミなどの家ネズミが渡来した可能性が考えられています。そして、現代に至るまで作物などへのネズミによる被害は続いています。

今回紹介した土器が齧られたタイミングはわかりませんが、石岡のネズミ被害の幕開けともなりえる土器となっています。

⇒ちなみにネコも弥生時代から日本列島
にやってきたとされています



ゆくすゑ⑤：土器の壊れ方

ここまで、ネズミの齧痕から当時の環境を推察しました。最後に、土器の廃棄をその壊れ方からみてみましょう。

モノは、しばらく経つと使用または経年劣化により破損します。5000 年前の土器でもそれは同様に、壊れたり、もしくは壊されたり(?)することで廃棄されます。

その壊れ方は、一箇所に強い衝撃がかかったことによると思われる同心円状にヒビが入ったもの、不規則な割れ方をしたものの、「短冊状土器破片」と命名されている粘土を積み上げた痕跡が確認できるものなど、実に多様です。

特に縄紋時代においては「短冊状土器破片」が、土器の製作および廃棄(?)行為を確認できる手段として着目されています。展示した「短冊状土器破片」は、幅が 3～5 cm のものが中心で、千葉県内の研究と類似しています。

縄紋土器を作る際に、その幅の粘土紐を多く作成して土器を製作したのでしょうか。また、短冊状の割れ方は廃棄行為と何らかの関係があるかもしれません。

土器の製作から廃棄までの一連の「ゆくすゑ」を確認できる良い資料です。

おわりに

今回の展示は、土器の「ゆくすゑ」に着目し、土器片錘を中心とした土器の再利用、げっ歯類と思われる動物の齧痕から土器の置かれた環境などに迫ってきました。

土器の新しい見方を発見していただき、過去の人々に思いを馳せていただくことができている幸いです。

石岡市には、まだまだ多くの遺跡・遺物があり、整理しきれないモノも数多く存在します。今後、さらに調査・整理を進めていく予定ですので、続報をお待ちください。

<展示に使用した主な参考文献等>

- ・渡辺誠 1976「スグレ状圧痕の研究」『物質文化』26
- ・上野佳也 1983「縄文時代の土製円盤について」『角田文衛博士古希記念古代学叢論』
- ・渡辺誠 1984『縄文時代の漁業』
- ・大橋一利 1987『破壊のメカニズム』
- ・海老原郁夫 1988「所謂土製円盤の用途について」『栃木県考古学会誌』9
- ・小林謙一 1989「縄文時代中期前葉段階の土器片錘にみる生業活動」『古代文化』41-4
- ・藤巻正信 1989「土器片円盤について」『新潟県考古学談話会会報』3
- ・山下孝司 1997「土製円盤私考」『ハケ岳考古』平成8年度年報
- ・長沢宏昌 2003「山間地の漁労と打欠石錘の用途」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』19
- ・丹野雅人 2004「縄文時代の土製品考」『白門考古論叢』
- ・近藤康久 2007「武蔵野-多摩-鶴見流域における縄文時代錘具の分布評価-GISで考古遺物の性格を読み解く-」『東京大学考古学研究室研究紀要』21
- ・丹野雅人 2008「土器片加工円盤・錘」『総覧縄文土器』
- ・岩崎厚志 2008「有孔円盤」『総覧縄文土器』
- ・鈴木素行 2012「岡田遺跡のネズミ」『ひたちなか埋文だより』36
- ・塚本師也 2017「阿玉台Ⅳ式期から加曽利E式古段階の土器様相-那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域との対比-」『縄文研究の地平 2017』
- ・植月学 2015「子」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社

- ・尾関清子 2018『縄文の布』
- ・植月学 2020「中峠遺跡第8次調査出土の動物遺体(含:人骨破片)」『下総考古学』25
- ・東京都江戸東京博物館編 2021『東京に生きた縄文人』
- ・河西久子 2023「まほろん収蔵の土製円盤について」『福島県文化財センター白河館 研究紀要』21
- ・畑山智史 2023「定住化の示標としての遺跡出土ネズミ遺存体における可能性-完新世初頭における出土状況とその課題-」『日本動物考古学会 第10回大会プログラム・抄録集』

- ・杉本智彦 2010『カシミール3D 入門編』
- ・国土地理院 HP <https://www.gsi.go.jp/top.html>
(最終閲覧日 2025年1月1日)

※これ以外にも茨城県域を中心とした多数の報告書、文献を参考としました。

- ・謝辞(50音順)
展示に当たっては、下記の方々にご助言・ご助力いただきました
畑山智史

石岡市立ふるさと歴史館 第39回企画展

いまゆくすゑも定めなき土器にて

令和7年1月8日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

茨城県石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

茨城県石岡市総社 1-2-10

TEL 0299-23-2398